

夏清用皂

SHIMADA  
SAYAKA

# 島田清夏 / SHIMADA SAYAKA

website: [shimadasayaka.com](http://shimadasayaka.com) email: [info@shimadasayaka.com](mailto:info@shimadasayaka.com)



photo: Utsuki Tsuchiya



<https://www.instagram.com/sayatarou/>



<https://www.facebook.com/sayaka.shimada>

島田 清夏は、日本大学芸術学部映画学科卒業。映画を学ぶ在学中に花火と出会い、そのエネルギーに魅了される。卒業後は(株)日本橋丸玉屋にて花火師として活動し、国内外の花火大会に花火演出家として参加してきた。

社会人としての経験を経て、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現(修士課程)に進学。修士課程以降は、花火の構成要素や物質性、火薬学、文化・歴史的背景に至るまで領域横断的な研究を行い、メディアを再構築することで新たな問いや潜在する問題を浮かび上がらせることを試みている。2010年から2023年まで霧の彫刻家・中谷芙二子と制作を共にし、指導を受けた。現在、東京藝術大学大学院後期博士課程在籍(2026年3月博士号取得予定)。花火のほか、火・雷・放射線・水などの現象をモチーフに作品を制作している。

# MAIN EXHIBITION

## 主な展覧会

- 2025 「東京藝術大学 博士審査展／博士展」東京藝術大学大学美術館、上野・東京  
「In Motion with the Sky」MYNAVI ART SQUARE ファイナリスト展、銀座・東京（ファイナリスト）  
「150年」東池袋一区画の建築群（全6棟）、池袋・東京
- 2023 「都市にひそむミエナイモノ展」SUSHI Tech Square、有楽町・東京  
「ATAMI ART GRANT 2023 外覧会」Annex Aoyama、青山・東京
- 2022 「Culture Gate to Japan」羽田空港第2ターミナル、羽田・東京  
「ATAMI ART GRANT 2022」The NEW AKAO HOTEL、熱海・静岡（公募選出）
- 2021 「次元の衝突点」展、The 5th floor、根津・東京（Collaborated with 鈴木ゆりあ）  
「Future Artist Tokyo」アートフェア東京、東京国際フォーラム、有楽町・東京
- 2020 「彫刻の象徴性と恒久性-」陳列館、上野・東京  
「第12回恵比寿映像祭-時間を想像する-」恵比寿ガーデンプレイスセンター広場、恵比寿・東京
- 2019 「平成31年度 東京藝術大学 卒業・修了作品展」上野・東京
- 2018 「KYOTO NIPPON FESTIVAL」北野天満宮、京都  
「New Japan」ソリャンカ国立美術館、モスクワ・ロシア  
「Shibuya Art Gate」渋谷西武・メインエントランス、渋谷・東京
- 2017-2018 「Cloud ⇄ Forest」第7回モスクワビエンナーレ、国立トレチャコフ美術館 新館、モスクワ・ロシア
- 2017 「RÊVER 2074」FIAC、グラン・パレ、パリ・フランス  
「RÊVER 2074 by Comité Colbert」東京藝術大学大学美術館、上野・東京（グランプリ）  
「ふたしかなその日」展、陳列館、上野・東京
- 2016 「数寄フェス」不忍池・上野公園、上野・東京（Collaborated with 日比野克彦）

# MAIN EXHIBITION

## 国際花火競技会・国際花火大会

- 2025 「Flammende Stern 国際花火競技会」オストフィルデルン・ドイツ（グランプリ）
- 2021 「IGNIS Brunensis 国際花火競技会 特別プログラム」ブルノ・チェコ共和国
- 2020 「Finale 3D 国際競技会」（プロフェッショナル部門 3 位）
- 2019 「第 29 回ハノーヴァー国際花火競技会」ヘレンハウゼン王立庭園、ハノーヴァー・ドイツ
- 2018 「ハイルブロン国際花火競技会」ハイルブロン・ドイツ
- 2014 「第 24 回ハノーヴァー国際花火競技会」ヘレンハウゼン王立庭園、ハノーヴァー・ドイツ（3 位）
- 2013 「Flammende Stern 国際花火競技会」オストフィルデルン・ドイツ（2 位）





# 火影 HIKAGE

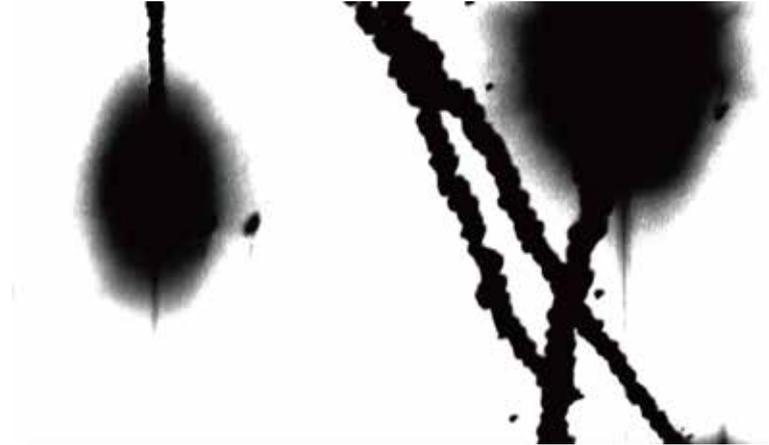
---

映像作品：1920\* 1080, 3min11sec, Black and White, Silent,  
2004, 2011 (Remake)



本作では、記号としての「花火」を定義づけている「鮮やかな色」、「強烈な光」、「大きな轟音」をあえて排除し、さらに映像のネガ・ポジを反転させ、花火を影のように黒い物体へと置換することで、花火の純粹な運動の軌跡を強調した。花火本来の祝祭性と集合性は影を潜め、モニター上に、まとまりのない個々の爆発とその軌跡が、特異な毒々しさをもって姿を現わす。

# 火影 / HIKAGE



"Seize the Uncertain Day" The Chinretsukan Museum Ueno, Tokyo, 2017  
Photo: Ryohei Tomita



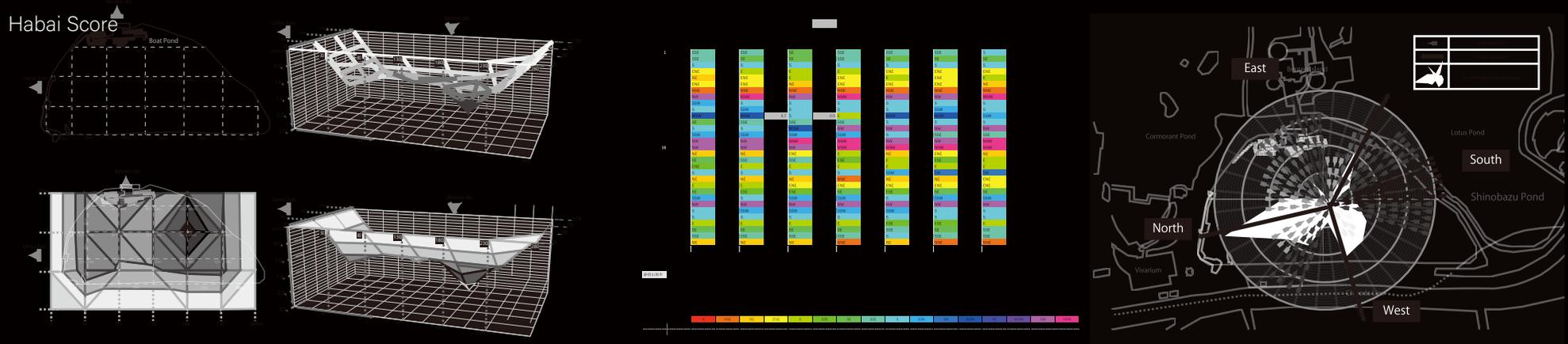
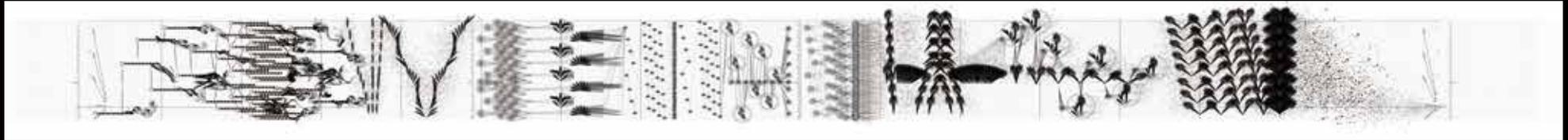
"Seize the Uncertain Day" The Chinretsukan Museum Ueno, Tokyo, 2017

## Main Exhibition:

- 2017-2018 「Cloud ⇄ Forest」 第7回モスクワビエンナーレ、国立トレチャコフ美術館 新館、モスクワ・ロシア
- 2017 「ふたしかなその日」展、陳列館、上野・東京
- 2011 クアラルンプール映画・映像フェスティバル「Program "3.11"」

# “和火・寂火”のためのリサーチと花火スコア RESEARCH AND HANABI SCORE FOR "WABI, SABI"

データ・花火スコア (592.3 x 59.4 cm, Thick Fine Paper and Scorch Marks) /2016



上野・不忍池(東京)で発表された花火作品《和火・寂火》に向けた環境調査の結果を、データファイルとしてまとめた。

周辺環境(動物園や道路からの距離、地下鉄の排気口の位置)、野鳥の生態、風向・風速、湿度、池の水位など、さまざまな要因を調査した。

これらのデータに基づき、花火を41艘の台船に配置し、池の周囲全周、どこからでも鑑賞できるようつまり、中心のない舞台を設計した。

池を平均的な速度で一周するのに約15分を要することから、上演時間も15分とし、そのための花火のスコア(構成)を制作した。

# “和火・救火”のためのリサーチと化火スコア / RESEARCH AND HANABI SCORE FOR "WABI, SABI"



photo: courtesy of the Moscow Biennale Foundation



## Main Exhibition:

2017-2018 「Cloud ⇄ Forest」 第7回モスクワビエンナーレ、国立トレチャコフ美術館 新館、モスクワ・ロシア

2016 「アトラス」展、東京藝術大学取手校地、取手・茨城

# 和火・寂火 WABI-SABI

---

花火パフォーマンス:15min, 協働:日比野克彦 /2016

Fireworks(gerbs, white comets, white mines, air-bursts, white flickers ect.), 41 fireworks barges



Photo: Masashi Hiruta

本作は、花火がもつ強烈な光(視覚)、爆発音(聴覚)、煙(嗅覚)といった特性を用いて、周囲の環境を立ち上がらせる試みである。

花火そのものを鑑賞するための作品ではなく、花火を媒介として、風の動きや周囲の建物からの反響など、会場の環境そのものを感受するための作品である。

花火によって、通常は意識されにくい場の条件が可視化・可聴化される。

# 和火・叔火 / WABI-SABI



Photo: Masashi Hiruta

# 和火・寂火 / WABI-SABI



Photo: Kazuma Saeki

## Exhibition:

2016 「数寄フェス」 不忍池・上野公園、上野・東京 (Collaborated with 日比野克彦)

# VOICE OF VOID ; 4600000000

インスタレーション作品：150.0 x 80.0 x 195.0 cm/ 2017

Video, Photo, Acrylic, Peltier Thermoelectric Cooler, Meteorite, LED, Male and Female Voice



## 《Voice of Void》

A view of the work visualizing the radiation of the ore

声をもたないものに声を与える。— 本作は、ジャン＝クロード・デュニャックによるSF短編小説『Diamond Anniversary』(2074年を舞台とする)に着想を得ている。

鉱物や宇宙線から放出される微細な放射線(空間を飛び交う放射線)を捉え、その動きを人間の声へと変換することで、「鉱物の声」を聴く試みである。音は人間の声をサンプリングしたもので、放射線の動きに応じて変化する。

さらに、「声」は放射線の軌跡としても表現される。放射線の軌跡を撮影した映像から18,000フレームの静止画を抽出し、そのデータをもとに100フレームごとに合成された軌跡が生成された。

小説において象徴的に描かれる、主人公と亡き妻の結婚指輪「ネビュラ・ダイヤモンド」に見られるように、本作は放射線を用いて時間(永遠と瞬間)を表現している。

# VOICE OF VOID; 4600000000



"RÊVER 2074", FIAC, @Grand Palais, Paris, France  
Photo: Pierre Morel © Comité Colbert



"RÊVER 2074", FIAC, @Grand Palais, Paris, France  
Photo: Pierre Morel © Comité Colbert

# VOICE OF VOID; 4600000000

## Voice of Void; 4600000000 II

Created another version for an exhibition in Solyanka State Museum, Moscow, Russia. 1,764 photos were installed all over the wall.



"Voice of Void; 4600000000 II" Installation View from "NEW JAPAN", Solyanka State Museum, Moscow, Russia  
Photo: Ira Polyarnaya

### Main Exhibition:

- 2018 「New Japan」 ソリャンカ国立美術館、モスクワ・ロシア (Voice of Void; 4600000000 II)
- 2017 「RÊVER 2074」 FIAC、グラン・パレ、パリ・フランス
- 「RÊVER 2074 by Comité Colbert」 東京藝術大学大学美術館、上野・東京 (グランプリ)

# HANABI GATE

映像作品： 5min, Color or Black and White, Sound/ 2018  
4 cylinder LED HD Displays, 5 Sound Speakers



本作は、渋谷スクランブル交差点近くの渋谷西武本館正面入口に設置された映像作品である。  
都市・渋谷の雑多で過剰なエネルギーを、花火の爆心を中心にした「一枚の像」へと圧縮し、四本の柱によって空間に定着させる。  
爆発の中心から放射する光と、街へ降り注ぐ火花は、祝祭の記号というよりも、都市の熱量が可視化された現象として提示される。

プログラムは1時間ごとに5種類の映像が順に位相を切り替える。  
色彩の反転、白黒化、再反転という操作によって、同一の爆発像が異なる知覚として立ち上がり、  
渋谷の時間帯ごとの密度、速度、ざわめきの変化を映像の内部に引き込む。

一日を通して鑑賞すると、爆発のイメージは固定された記号ではなく、  
街の状態に呼応して揺らぐ「都市の脈拍」として現れる。

# HANABI GATE



## Exhibition:

2018 「Shibuya Art Gate」 渋谷西武・メインエントランス、渋谷・東京

# BEAUTY AND/OR SCARY

花火パフォーマンス：25min, Fireworks / 2018



Photo: Hubert.h.Hartmann

本作は、ドイツ・ハイルブロンで開催された国際花火競技会の招待作品として制作された。

花火は祝祭の光であると同時に、火薬という同一の物質に由来する以上、扱う者の意志と状況によっては暴力の技術へと反転し得る。本作は、その両義性、歓びを与える「美」と、人を傷つける可能性を孕む「恐怖」を、一つの花火表現の内部で衝突させ、共存させる試みである。

制作においては、音楽を起点に花火を構成し、さらに花火の運動から音楽へとフィードバックする「往還」の手法を用いている。例えば、まず恐怖の相を立ち上げる起点としてモーツァルト《レクイエム〈怒りの日〉》を選び、その音楽に対して花火を振付した。次に、花火の動きが生み出す時間構造や緊張のうねりを手がかりに、作曲家へ「恐怖」と対照的な「美」の音楽の制作を依頼した。同様に、他の楽曲についても、音楽→花火→音楽という循環を通じて構成している。

音楽から花火へ、花火から音楽へ——この往還のプロセスによって、本作は一回の上演のなかに「恐怖」と「美」を同時に作動させる。祝祭の形式の内側に潜む暴力性を露呈させながら、なお光として立ち上がる瞬間を、観客の感覚と倫理のあいだに残す作品である。

# BEAUTY AND/OR SCARY

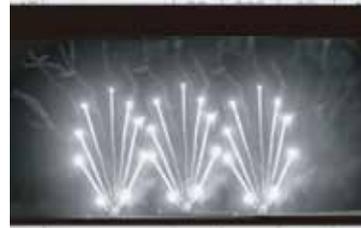


Photo: Hubert.h.Hartmann



Photo: Sebastian Gerhard

	Event	PFI	ADDR	OGHZ	QTY	QAL	REF	TYPE	DUR	Effect Description
00		00	000	00	1	65	224	Shell	00:00	Yellow Peony
00		00	000	00	1	65	224	Shell	00:00	Yellow Peony
06		00	000	00	1	65	224	Shell	00:00	Yellow Peony
24		00	000	00	1	25	187	ONE SHOT EF	00:00	10'S Red Comet Tail - 1 x 10-shots
00		00	000	00	1	25	187	ONE SHOT EF	00:00	10'S Red Comet Tail - 1 x 10-shots
09		00	000	00	1	25	187	ONE SHOT EF	00:00	10'S Red Comet Tail - 1 x 10-shots
00		00	000	00	1	30	178	ONE SHOT EF	00:00	7" S One Shot Fan Silver Comets and P
00		00	000	00	1	30	178	ONE SHOT EF	00:00	7" S One Shot Fan Silver Comets and P
06		00	000	00	1	30	178	ONE SHOT EF	00:00	7" S One Shot Fan Silver Comets and P
00		00	000	00	1	100	274	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						100	274	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						100	274	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						100	274	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						75	273	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						75	273	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						75	273	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						75	273	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum
						75	273	Shell	00:00	Purple Swirly Chrysanthemum



Fireworks Design and Fireworks Simulation for Composition

## Performance:

2018 "Flammende Stren" International Fireworks Competition, ハイロブロン・ドイツ

# 雷松・花松 RAISHO-RAIKA

インスタレーション作品 / 2018

Pine (Japanese black pine, Japanese red pine, Pinus pumila)、Arduino、PC、Monitor、Water、LED、Acrylic



北野の地はもともと雷の多い土地であり、天満宮が建立される以前には、雷神は「火と雷の神」として存在していた。雷の多い年は豊作になるといわれるが、それは雷放電によって窒素固定が起こり、土壌が肥沃になり、実りがもたらされるためである。雷は恐ろしい存在である一方で、豊穡をもたらすという二面性を持つ。その性質は、私が日頃扱う花火(火薬)とも重なっている。  
(つづく→)

# 雷松・雷化 / RAISHO-RAI-KA

作品制作の実験を行っていた折、9月に京都を襲った台風により、北野天満宮の多くの松が倒れたというニュースを知った。これを受け、会期中に雷の力によって松を育てる作品を急遽構想した。

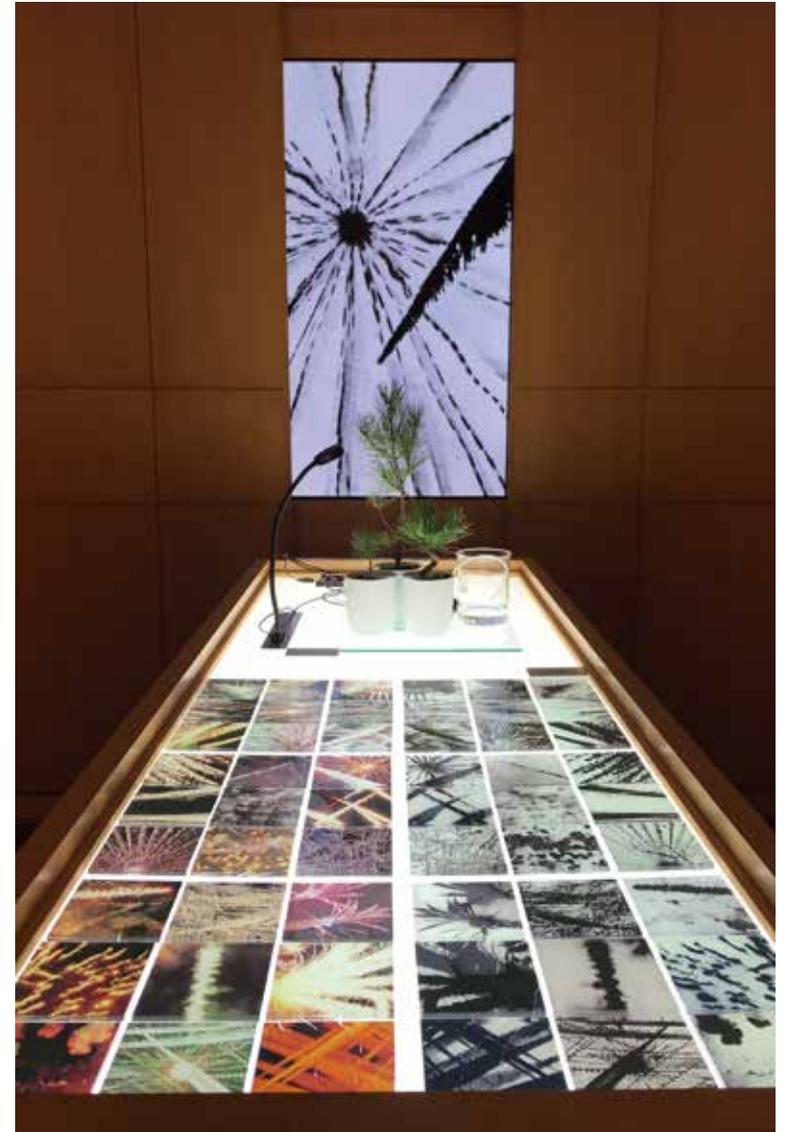
雷の専門企業であるフランクリン・ジャパン株式会社の協力のもと、北野天満宮を中心とする半径1,000km圏内で落雷が発生した際のデータをネットワーク経由で取得した。

落雷が起こると、モノクロ映像はカラーへと変化する。一定回数の落雷が観測されると松に水が与えられ、さらに回数が増えると植物育成用LEDが点灯する。

雷が多く発生するほど、松に与えられるエネルギーは増していく。雷が多ければ多いほど、松はより成長する。

会期中に松がどこまで育つのかは、火と雷の神のみぞ知る。

展示終了後、成長した松は北野天満宮へ奉納された。



# 雷松・雷化 / RAISHO-RAI-KA



When lightning strikes, the movie image is in color.



When lightning strikes, water is given through the tube, and after a certain number of lightning strikes LEDs for plant growth change from red to blue to purple to encourage growth and nurturing.

## Exhibition:

2018 「KYOTO NIPPON FESTIVAL」 北野天満宮、京都

# 7HX+8H4V

花火パフォーマンス / 2019

fireworks, fireworks ignition systemn, steel, aluminum, winch, battery, pulley, drone camera



本作は、花火を鑑賞する際の「視点の高さ」が知覚や心理に与える影響を検証するための実験的作品である。

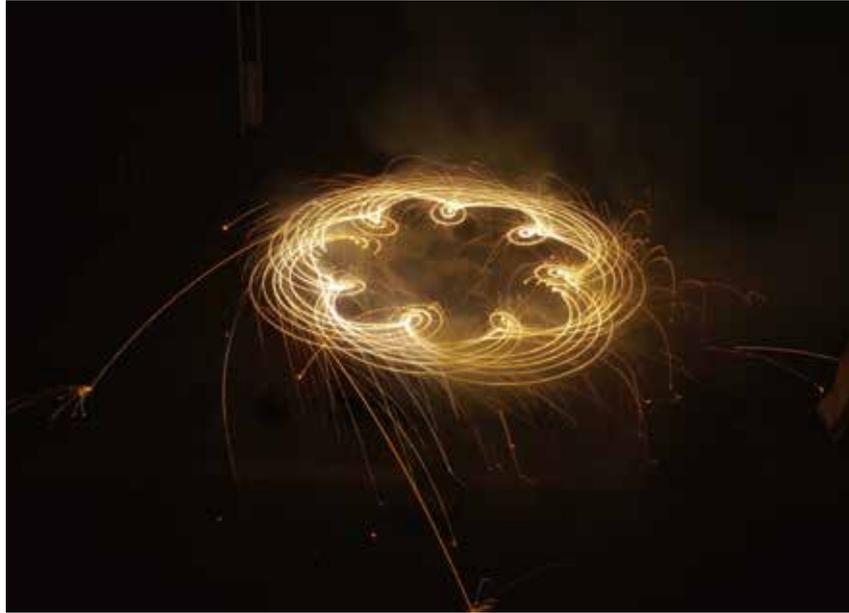
タイトル「7HX+8H4V」は、位置情報を符号化するGoogleプラスコード(Plus Codes)から導かれている。

花火の点火地点のコード「V4H8+XH7」を鏡像的に反転させ、作品名とした。

地表上の一点が文字列へと置換されるこの仕組みは、場所を俯瞰的・相対的に扱う現代の視覚文化とりわけ地図や衛星画像が日常的に流通する環境を象徴している。

(つづく →)

# 7HX+8H4V



今日、Google Earthなどによって「見下ろす視点」のイメージは身近になった。

一方で、花火の鑑賞は本来、空を見上げる体験として成立してきた。

本作《7HX+8H4V》は、この視点の向きを反転させたとき、花火の経験がどのように変わるのかを確かめるための実験的な装置である。

本作では、小型煙火と機械仕掛けを組み合わせ、火薬の運動が描く「軌跡」を地上に生成する装置として設計した。

鑑賞者は地上から見上げるのではなく、周囲の建物の上階から覗き込むことで、初めてその全体像を捉える。

見下ろすことで、火の現象は「一瞬の爆発」ではなく、時間のなかで生成される図形として立ち上がる。

しかし同時に、距離が生まれ、見上げる体験とは異なる感情や解釈が生じる。

本作は、視点の位置が変わるだけで知覚の焦点と意味がどのように組み替わるのかを検証するための装置である。

## Exhibition:

2019「平成31年度 東京藝術大学 卒業・修了作品展」上野・東京

/HX+8H4V



# /HX+8H4V



still from beside view

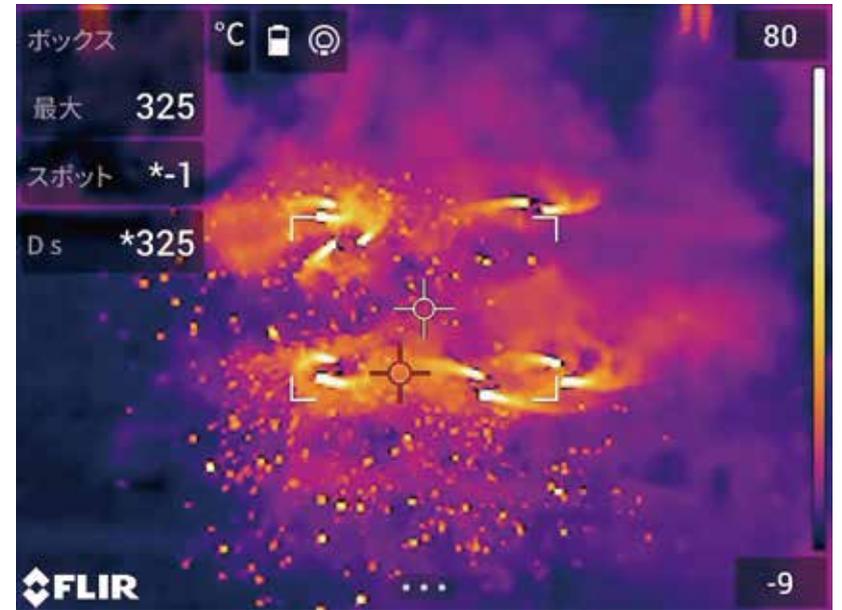


from drone footage



from drone footage

# /HX+8H4V



from the thermography footage



from drone footage



a part of installation view

# R9+C9QP

花火パフォーマンス / 2020

fireworks, fireworks ignition system, steel, aluminum, winch, motor, battery, pulley, drone camera  
No trespassing tape, pylons, FM radios, screens, etc.

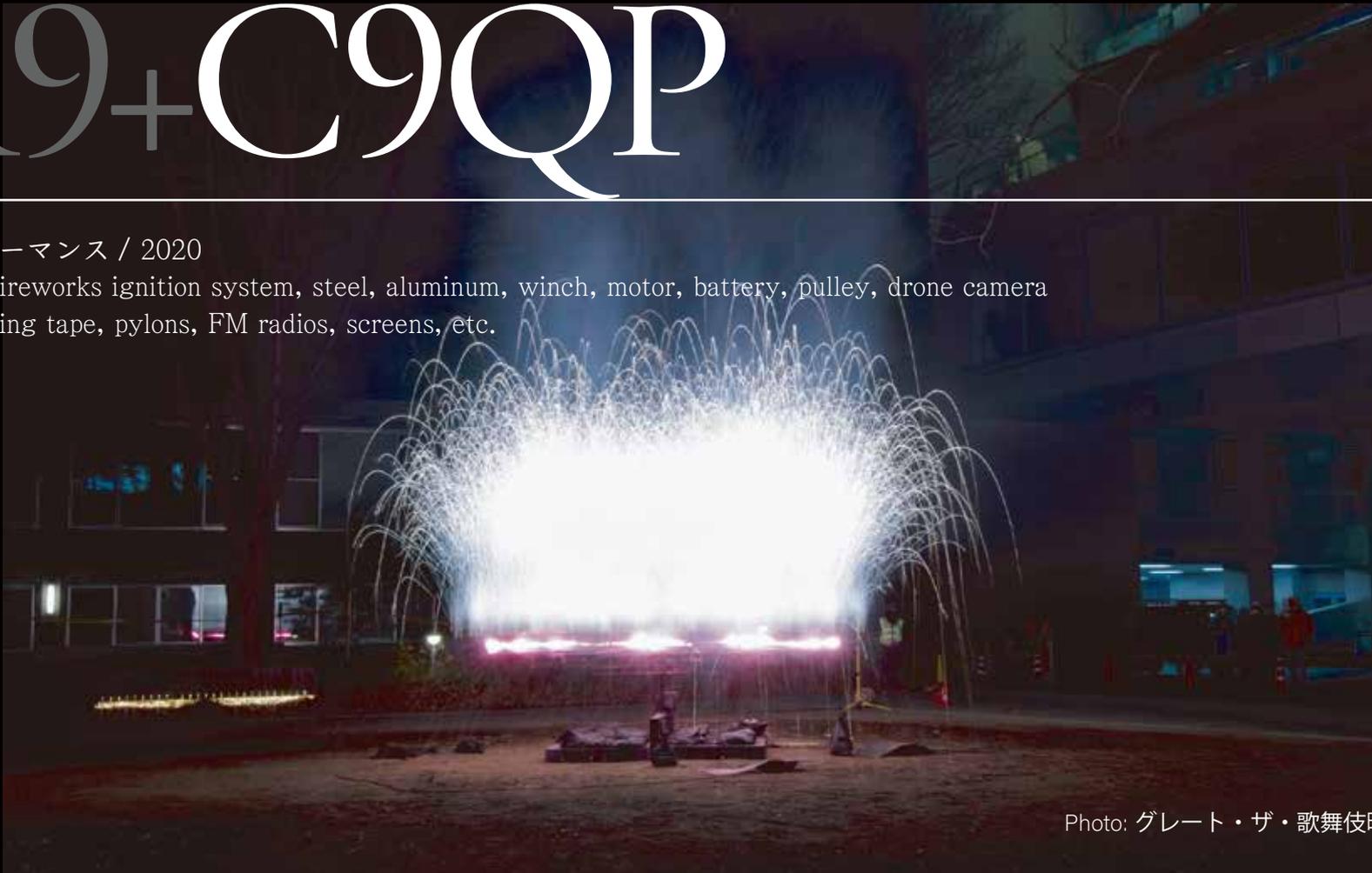


Photo: グレート・ザ・歌舞伎町

本作は、花火を鑑賞する際の視点や心理的効果を検証する実験／デモンストレーションのシリーズ第二回として、2020年末、新型コロナウイルスの状況が少し落ち着いた時期に実施された。

会場には、立入禁止や安全距離を設定し、導通点検が何度も繰り返され、火花が飛び、煙の匂いが漂う状況を作り出した。黄色いベストの火薬作業員が動き、無線で指示が飛ぶ。そうした「現場の条件」そのものを、作品の要素として扱っている。

観客には携帯ラジオを配り、無線のやりとりが聞こえるようにした。見えない境界が、音によっても立ち上がる。観客はただ見るだけではなく、その境界の外側に立たされていることを、聴くことで体感していく。

また、密を避けるために鑑賞地点を分散させ、周辺の大学校舎のどこから見下ろしても鑑賞できるように構成した。見る場所が違えば、同じ花火でも受け取り方が変わる。その差異が、ソーシャルディスタンスの状況と重なって浮かび上がる。

実施の様子は撮影され、ライブ配信された。現場でしか分からない感覚と、画面越しに見る視点の差もまた、作品の一部になっている。

# R9+C9QP



Photo: グレート・ザ・歌舞伎町

## Exhibition:

2022 「Public Divice - 彫刻の象徴性と恒久性 -」 陳列館、上野・東京

# R9+C9QP



Photo: グレート・ザ・歌舞伎町

# R9+C9QP

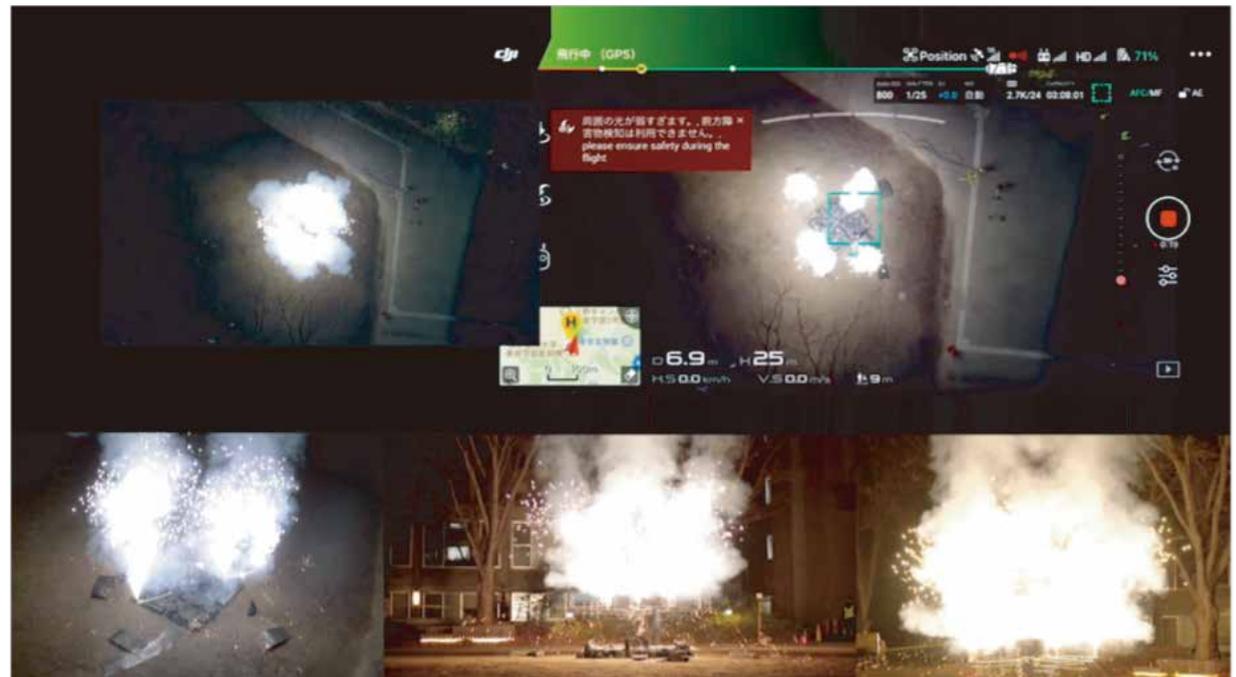


Photo: グレート・ザ・歌舞伎町

# R9+C9QP



# R9+C9QP



# HANABIRIUM & DRAWING BY FIREWORKS

フルドーム映像作品



花火をモチーフに制作された全天周映像作品《ハナビリウム》と、そのプログラムの幕間に上映された、花火によるドローイング・アニメーション作品。

Exhibition:

2020 「第12回恵比寿映像祭 - 時間を想像する -」 恵比寿ガーデンプレイスセンター広場、恵比寿・東京

# ATgC PROJECT

プロジェクト / Algorithm generation : Suzuki Yuria(Bioinformatics, The University of Tokyo) /2021  
video, fireworks simulation, algorithm software



Fireworks generated from James Watson's DNA

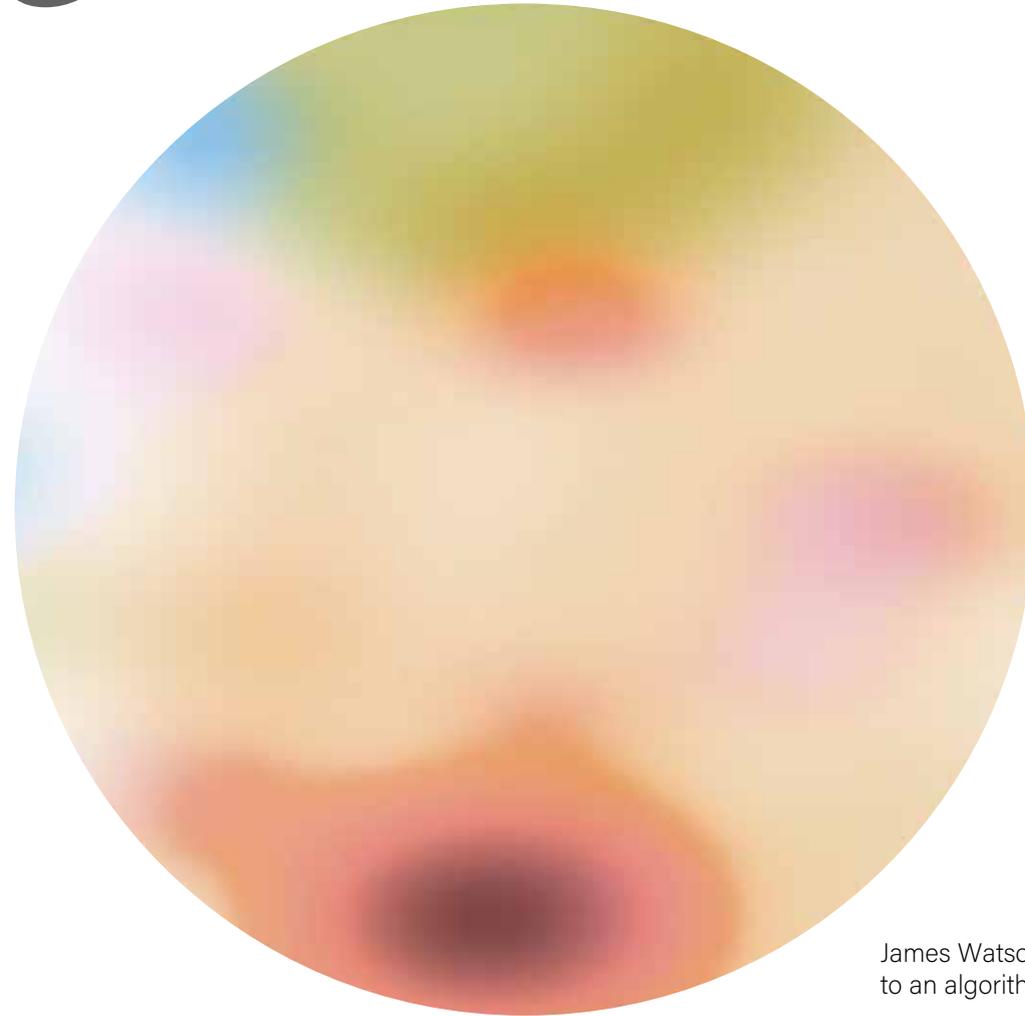
本プロジェクトは、人間のDNA情報をもとに花火を創出する継続的な取り組みである。

DNAの二重らせん構造を発見した研究者の一人であり、世界で初めて自身の遺伝情報を公開した人物であるジェームズ・ワトソン(1928年生)の遺伝情報をもとに、その遺伝的特徴の一部を花火の種類や色へと対応づけた。それらは、シミュレーション映像、音響、写真によるインスタレーションとして展開された。

また、遺伝情報だけでなく、人の性格や人生形成に影響を与える「環境要因」も考慮し、作品に反映させている。

今後は、誰もが自分自身、あるいは大切な誰かを表象する花火を打ち上げることができるプロジェクトへと発展させることを目指している。

# A1gCPROJECT



James Watson's haplotype values are subjected to an algorithm to determine the color pattern

## Exhibition:

2021 「次元の衝突点」展、The 5th floor、根津・東京 (Collaborated with 鈴木ゆりあ)

# おとずれなかったもう一つの世界のための花火 FIREWORKS FOR ANOTHER WORLD THAT NEVER CAME

**Performance, Video and Installation / 2022**

fireworks (aprox. 1,300 shots) , drone camera \*2 , tubes for fireworks, LED multi-monitor, monitor display (2022)



The shape of Japan appeared mapped by fireworks in a 20,000 m<sup>2</sup> rice paddy

歴史的に、日本の花火大会は「祝祭」と「鎮魂」という相反する意味を併せ持ちながら発展してきた。

2020年に新型コロナウイルスの影響で日本国内で中止となったすべての花火大会の時間的・地理的データを収集・分析し、本来存在していたはずのもう一つの世界を想起させる花火を実際に打ち上げることで、失われた祝祭に捧げる作品を制作している。

1日を1秒に換算し、365秒間の花火パフォーマンスを制作した。その様子はドローンによってライブ撮影された。



【アーティスト・コメント】

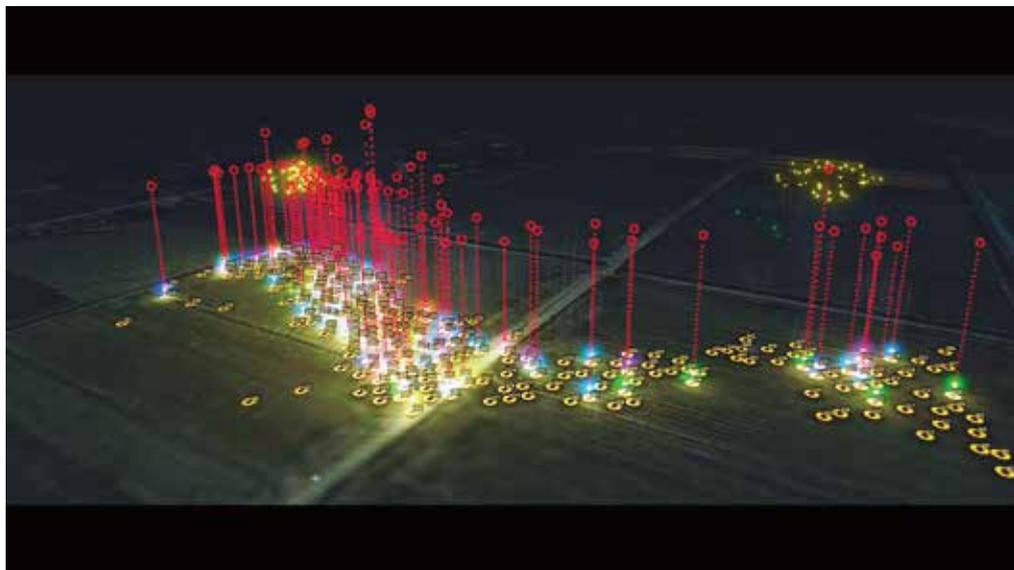
2020年から2021年にかけて、多くの人々が集まるイベントや祭りの大半が、新型コロナウイルスの影響で中止となった。本作では、約1,300件の中止された花火大会のデータを用い、実際に花火を打ち上げ、その発射に使用した筒や「失われた」花火の映像を用いてインスタレーションとして再構築した。

この作品が、ここ数年のあいだにどこかに置き去りにしてしまった感情を思い出すきっかけとなり、実現しなかった「もう一つの世界の花火」を、私たちの心の中に灯すことを願っている。

記録映像より



横から見た花火の映像より



花火のライブ映像撮影のために綿密に制作されたシミュレーション



田んぼに設置された花火筒



本プロジェクトのために花火の火薬を筒に装填する様子

本プロジェクトで実際に使用された花火筒のインスタレーション風景



**Exhibition:**

2023 「都市にひそむミエナイモノ展」 SUSHI Tech Square、有楽町・東京

2022 「Culture Gate to Japan」 羽田空港第2ターミナル、羽田・東京

Photo: Ryuichi Maruo



Photo: Ryuichi Maruo

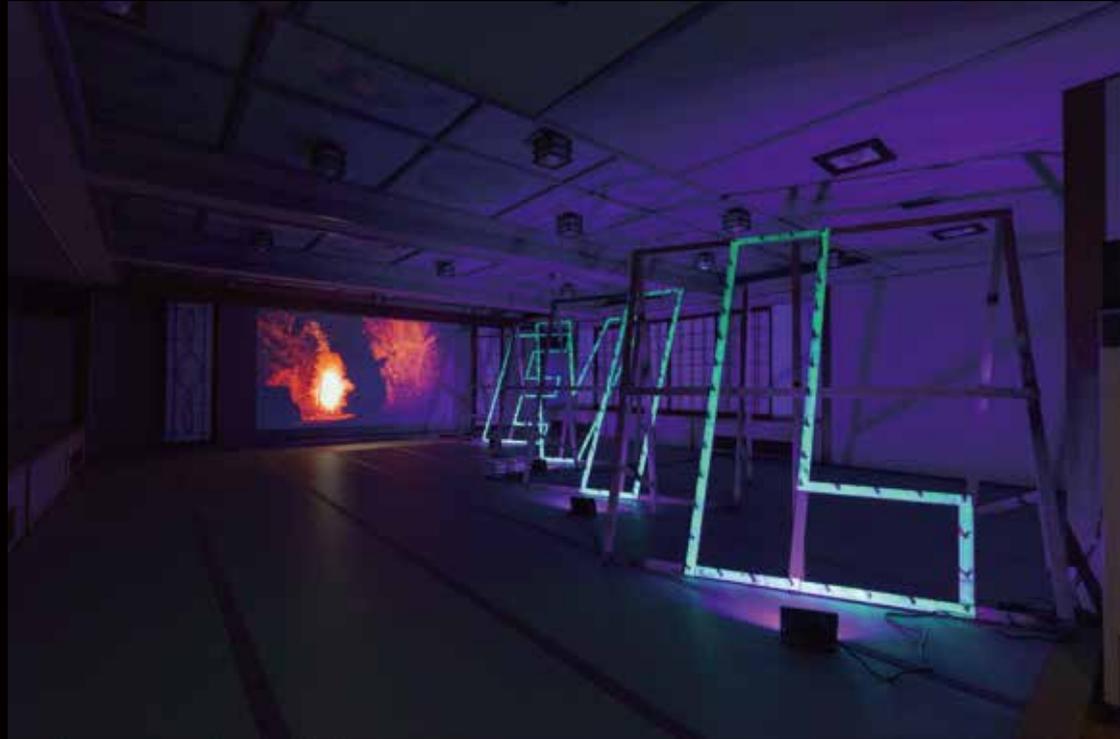


# LIVE/EVIL

---

花火パフォーマンス・映像インスタレーション作品 / 2022

fireworks (lance red to blue 1min 168shots and fuses) , wooden frame, phosphorescent paint , 4 black lights, projector



“LIVE” and “EVIL” インスタレーション風景

©ATAMI ART GRANT 2022

Photo: Naoki Takehisa

「LIVE」の各フレームは、実際に花火を取り付けた木製の枠である。  
ブラックライトに照らされることで、花火の焦げ跡は黒く浮かび上がる。それは花火の光に対する影のようでもある。

「LIVE」という言葉は、反対側から読むと「EVIL」となる。  
日本の花火は「鎮魂」や「平和への祈り」という意味を持ち、生命(LIVE)を肯定する。  
一方で、同じ火薬は憎しみから生まれた戦争の武器(EVIL)として用いられ、生命を否定することもできる。

煙を伴いながら美しく燃え上がるその一瞬は、静かな祈りのような時間である。

# LIVE/EVIL

花火パフォーマンスより



## Exhibition:

2023 「ATAMI GRANT 2023 外覧展」 Annex Aoyama, 青山・東京

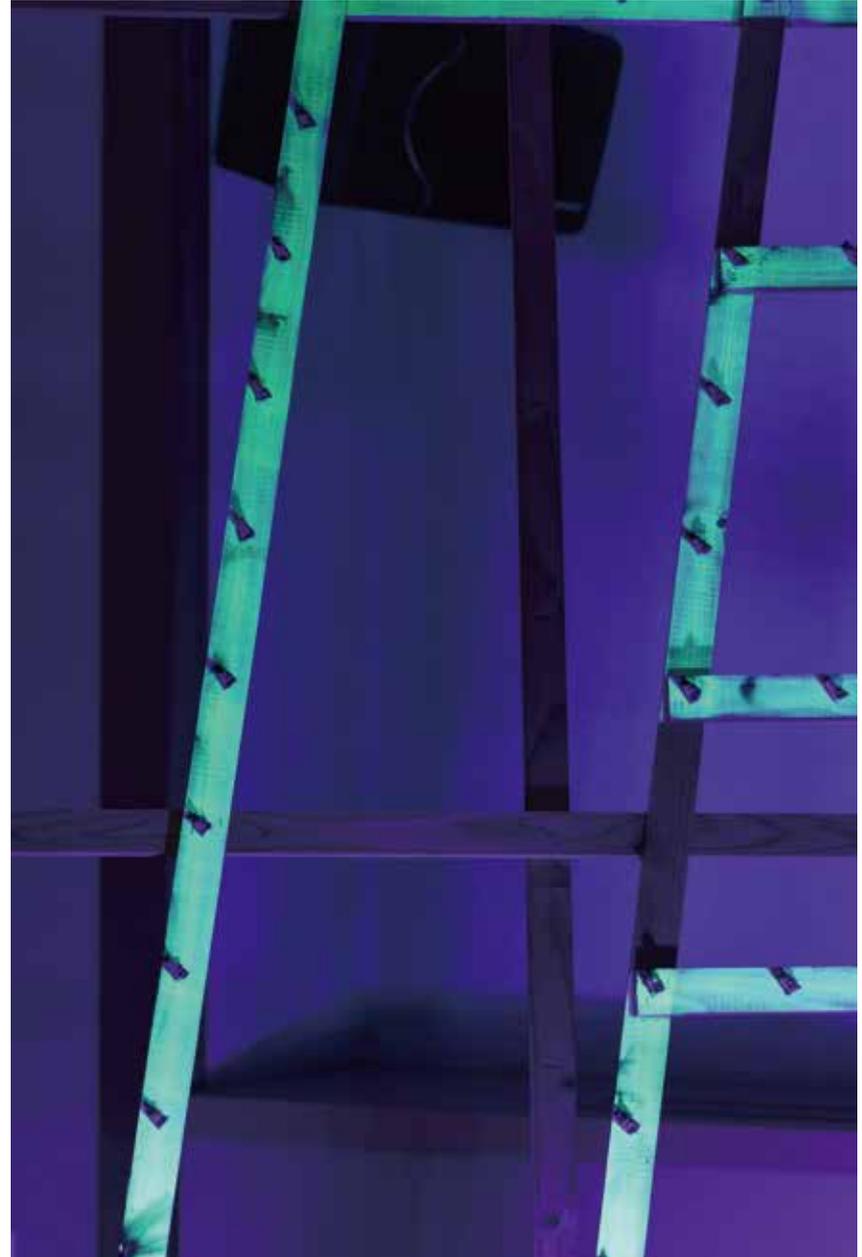
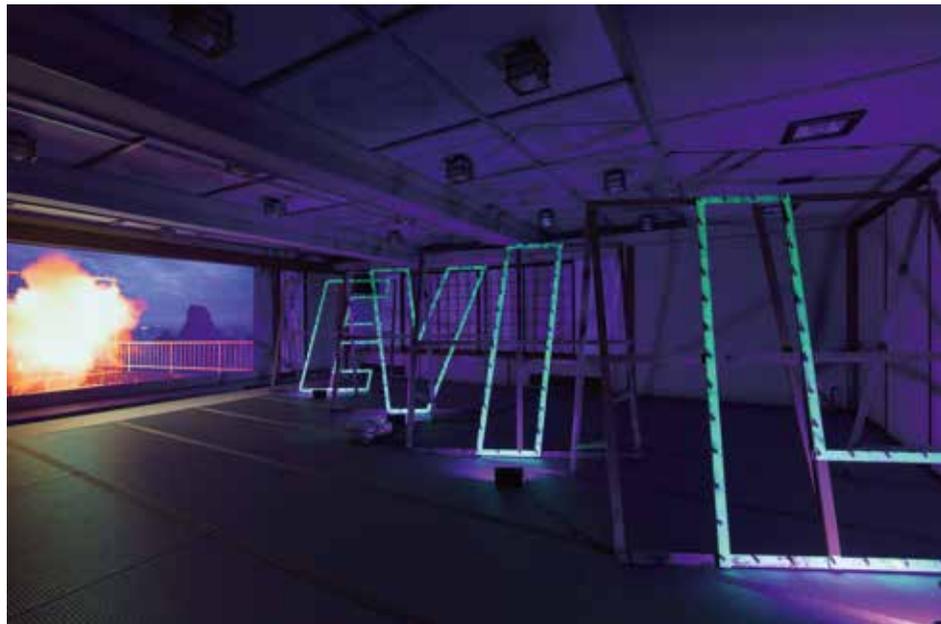
2022 「ATAMI GRANT 2022」 The New AKAO Hotel、熱海・静岡

# LIVE/EVIL

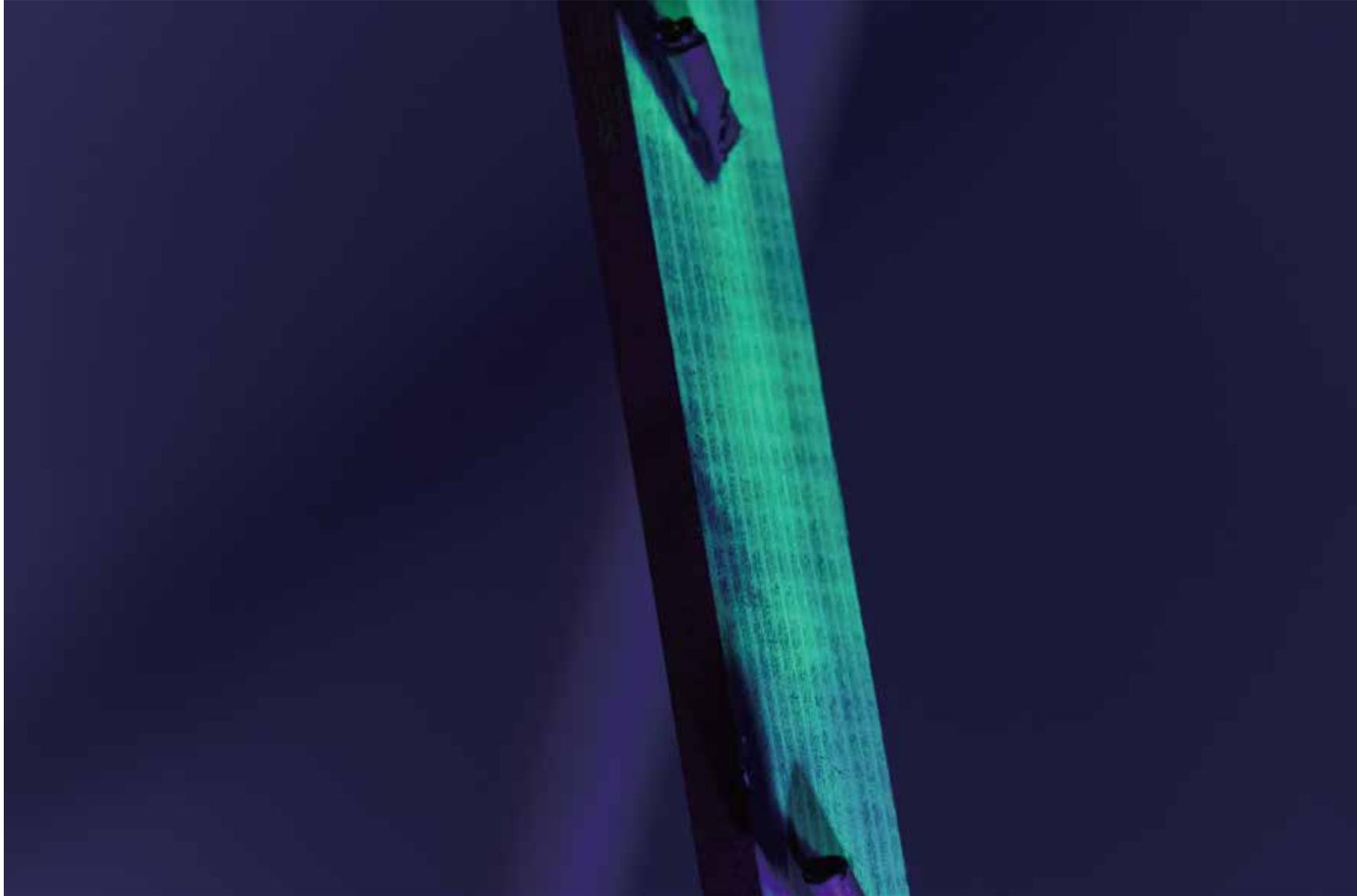
花火パフォーマンスより



# LIVE/EVIL



# LIVE/EVIL

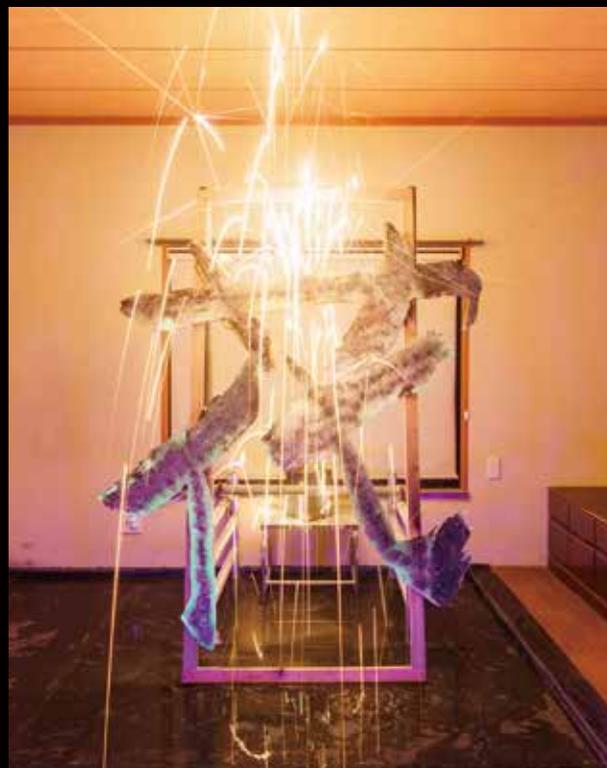


©ATAMI ART GRANT 2022  
Photo: Naoki Takehisa

$$L = \sum_{i=1}^N t_{\text{ephemeral}}$$

花火パフォーマンス・インスタレーションパフォーマンス / 2025

fireworks (100 × 8 mm stars, fuse, etc.), indoor fireworks/pyrotechnics, wooden frame, phosphorescent paint, two black lights, monitor (display)



本作は、東池袋一区画(全6棟)の建築群を会場として開催された展覧会「150年」に出品された作品である。

「学制」は、日本の近代的な学校制度であり、義務教育の基盤として150年前に制定された。  
しかし、女子の就学率は昭和初期まで低く、女性は家庭に属し教育を必要としないとする当時の価値観を反映していた。

作者の祖母もまた、小学校低学年までしか通うことができず、その後は独学で読み書きを身につけた。  
本作は、祖母が書いた拙くも美しい「花」という文字を、花火の一瞬の閃光によって蘇らせるものである。  
花火に蓄光塗料を施して焼き付けた文字は、会期中、1時間に一度、室内花火の光によって照らされ、ゆっくりと浮かび上がる。

# $L = \sum_{i=1}^{\infty} \text{ephemeral}$



installation view  
Photo: Naoki Takehisa

## Main Exhibition:

2025 「In Motion with the Sky」 MYNAVI ART SQUARE ファイナリスト展、銀座・東京（ファイナリスト）

「150年」東池袋一区画の建築群（全6棟）、池袋・東京

# here/there

---

花火パフォーマンス・映像インスタレーション / 2025

555 gerbs, 213 rocket fireworks, 768 ignition pellets, approx. 8,000 m of wire, approx. 200 wooden stakes, fireworks firing system (two circuits), steel stakes, two surveying instruments, two drone cameras, five ground cameras (360 degrees ultra-wide), one side camera

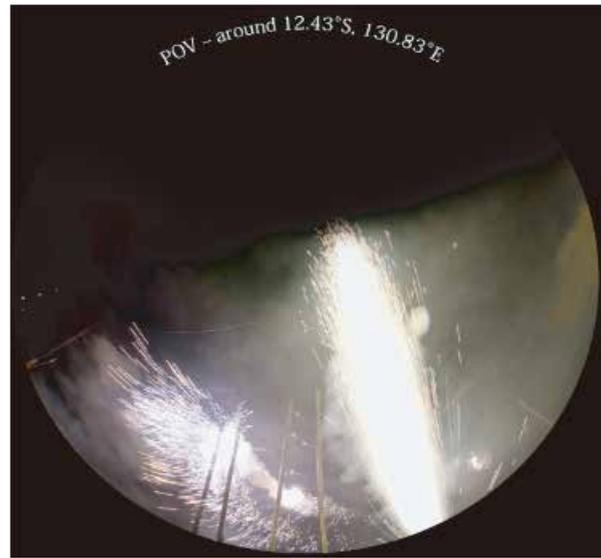


installation view



本作は、第二次世界大戦の攻撃を「点と線」として縮尺配置し、火薬の閃光によって地上に描き出す作品である。俯瞰的な視点が与える全体の明瞭さと、地上の主観的な視点がもたらす生々しい近さ、その痛みとのあいだにある非対称性を浮かび上がらせる。俯瞰映像だけでなく複数の地上視点を併置することで、鑑賞者の視点を往復させ、可読的な理解と身体的な実感のあいだに生じるズレを作品の構造として提示する。博士審査展出品作。

# here/there



作品映像からの静止画

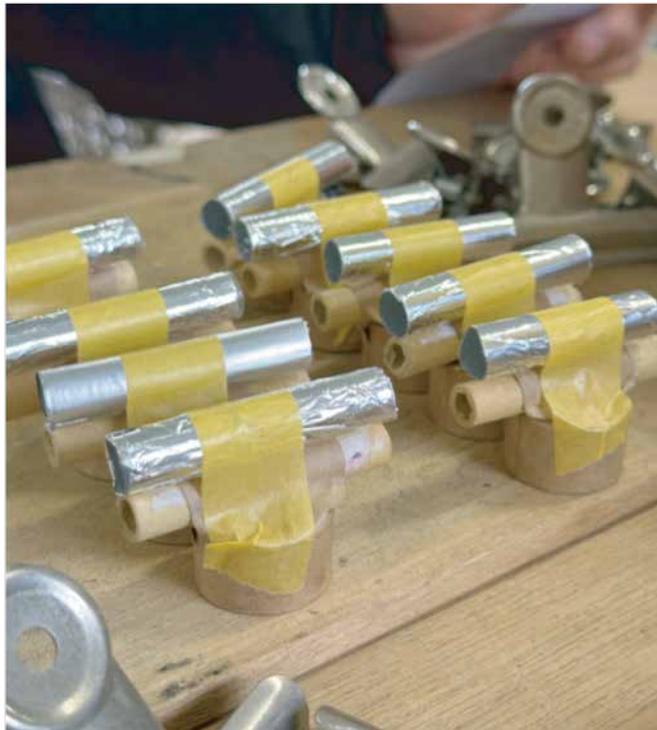
# here/there



リサーチデータの一部



花火の設置状況の様子



花火の制作過程



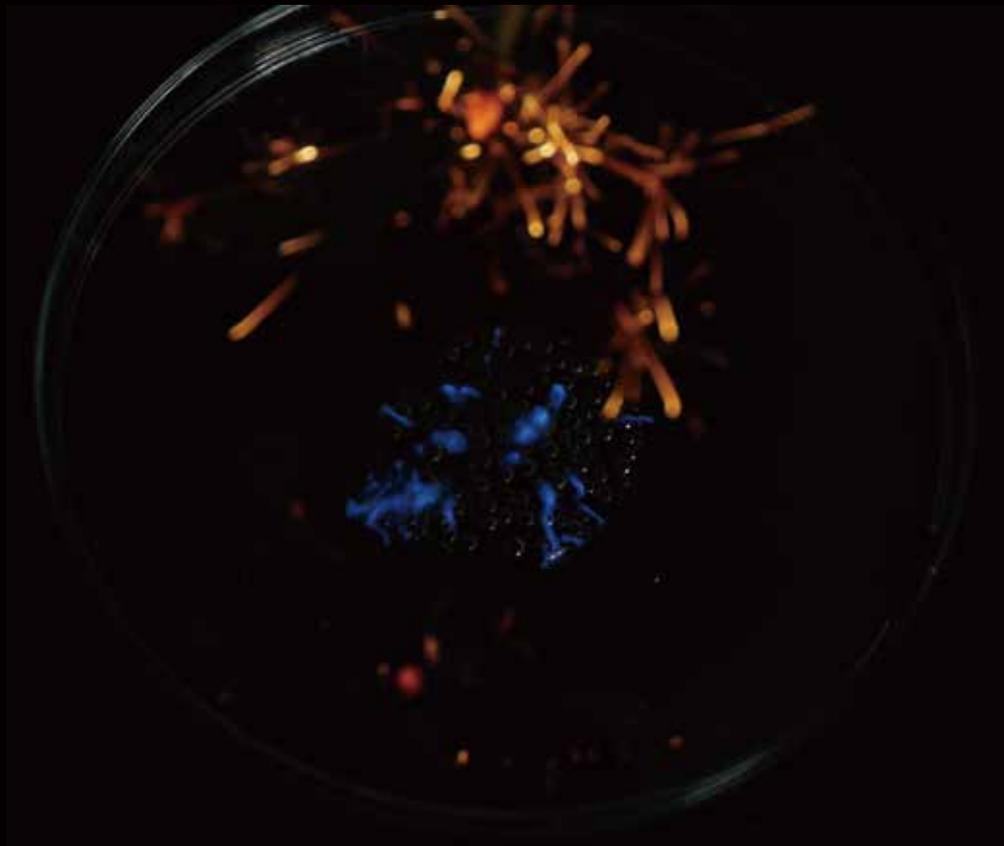
花火の設営の様子

# 進行中PROJECT/W.I.P PROJECT

プロジェクト / from 2022

black powder, blood, dna(protein), etc..

現在進行中のリサーチプロジェクト



血液から花火をつくる実験のイメージ。  
血液をルミノール溶液と反応させ、青い炎のように発光させている。

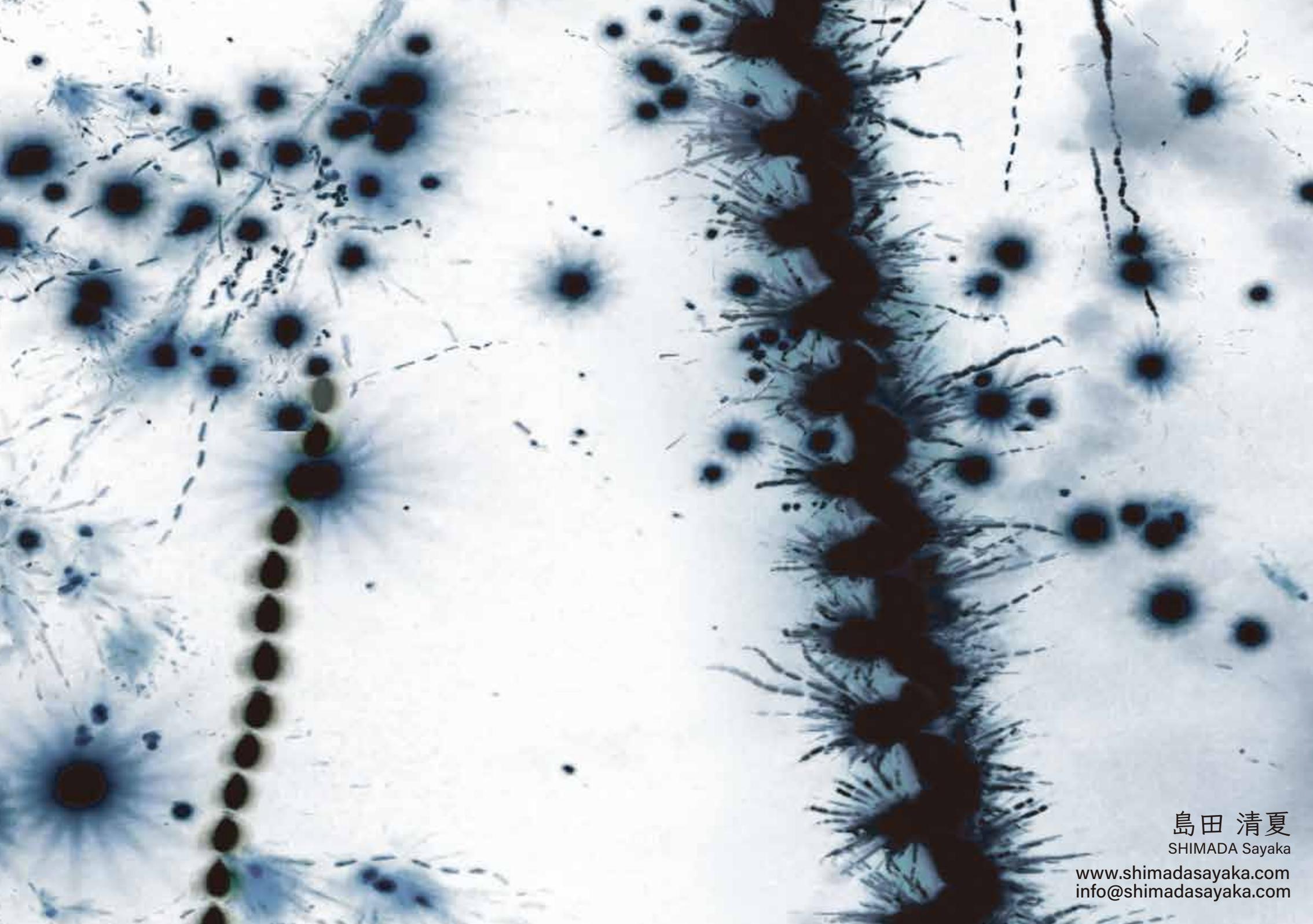
# HANABI FROM HUMAN BODY



## 【コメント】

本作のコンセプトは、「人間から花火(火薬)をつくること」である。  
私は、人間の身体を構成する要素から花火をつくるのが可能かどうかを実験している。  
血液を採取して分離し、鉄を抽出して火薬と混合すること、DNAを採取して乾燥させ火薬と混合すること、  
髪の毛から硫黄を抽出すること……といった試みを行ってきた。

将来的には、人間の身体から得られる有機物を起点に無機的な花火を生成し、「私 → 火薬 → 花火 → 燃焼 → 煙……」という  
変容(メタモルフォーシス)のプロセスを立ち上げたいと考えている。



島田 清夏  
SHIMADA Sayaka

[www.shimadasayaka.com](http://www.shimadasayaka.com)  
[info@shimadasayaka.com](mailto:info@shimadasayaka.com)